

将来を担う漁業者の挑戦

「つくり育てる漁業」を目指す第一歩

東しゃこたん漁業協同組合では、厳しい日本海漁業の振興策として国や北海道の支援制度を活用してこれまでも様々な試験事業を行ってきました。
「漁業」を町の基幹産業として将来に繋ぐ「つくり育てる漁業」の新たな取組を紹介します。



▲餌用の養殖コンブ

キタムラサキウニ海中肥育 実証試験

ホソメコンブで身を肥やす

道の「日本海漁業振興緊急対策事業補助金」を活用し、漁港内や磯焼け漁場に生息している身入りの悪いウニを漁港内の養殖カゴに収容し、餌として養殖したコンブを与えて身入りを向上させる試験を、平成27年度から幌武意漁港内で美国支所青年部が、平成28年度から余別漁港内で積丹支所青年部が実施してきました。

3月に捕獲し、6月まで養殖カゴで給餌を行ったところ、身



▲ウニ肥育試験

の歩留まりは5%から16%へと3倍以上まで向上し、販売可能な状態にまで肥育することに成功しました。このウニは5月の「どっこい積丹さくらます祭り」や6月の「積丹ソーラン味覚祭り」で試験販売し、天然物と遜色ない味わいに高い評価を得ました。

この試験により、未利用で身の痩せたウニでも出荷可能な状態にまで身を太らせる手法が実証されました。

今年度は更に、養殖カゴや餌のホソメコンブの養殖施設の増設を行い、事業の拡大を目指しています。

ウニ陸上蓄養実証試験

”時化の日”の出荷を目指す

町の重要な観光資源となったウニは、時化で出漁出来ない日が続くとお荷が止まり、観光業等へも影響が及んでいる状況が今も続いており、供給の安定化を図る対策が長年望まれてきました。

そこで同組合では、国の地方創生推進交付金を活用し、平成29年7月から9月まで美国漁港荷捌所内でキタムラサキウニの



▲ウニ陸上蓄養試験給餌作業

陸上蓄養技術開発を目的とした実証試験を実施しました。週に1度ホソメコンブを与えたところ、蓄養開始時に平均17%であった身の歩留まりは、8月下旬で平均21・6%と、当初の予想に反して良好な結果となりました。この成果については、研究機関で試験データの解析を行い、要因を明らかにする予定です。

予定です。

9月11日に商工会、観光協会や飲食店、宿泊業者を対象に実施した食味試験でも高い評価をいただき、9月上旬まで積丹ブランドのウニに求められる高い品質を保てる技術改良の可能性も出てきました。

このように、6月から8月までの操業期間中に時化でウニ漁がない日でも、陸上水槽での蓄養により供給が可能となること。さらに、ウニ

漁が終了した9月でもウニが供給できる可能性も見出せそうです。

今後は、さらに試験を続けて、蓄養技術の向上を目指すとともに、今年度中に導入する新たな改良型水槽施設の設置場所の整備や管理運営方法、供給体制などの事業化に向けた検討に入ることになります。

ナマコ人工採苗生産・放流事業

漁業者が種苗を作り資源を増やす

ナマコは、ウニに次ぐ重要な生産高を占めていますが、資源の維持増大を図ることの重要性は漁業者自らも痛感している現状です。そのため、ナマコの大さや漁獲量を制限する資源管理はもちろん、資源量を積極的に増やすための人工種苗生産による資源添加が不可欠です。

美国地区浅海部会と余別潜水ナマコ部会では、今年の8月に前浜に生息しているナマコから採取した卵を人工的に受精させ、ふ化させた浮遊幼生を飼育して種苗を生産する試験事業を道の「日本海漁業振興緊急対策事業補助金」を活用して実施しました。

美国地区では約120万粒、余別地区では約200万粒の種苗を生産し、それぞれの海域に放流することが出来



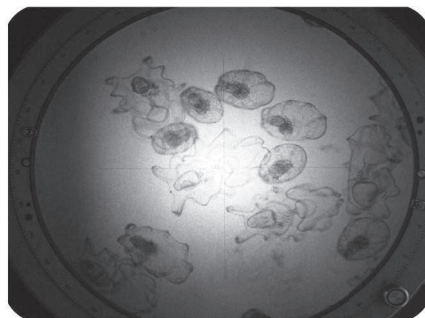
▲ウニ食味試験



▲ナマコ人工種苗の放流



▲ナマコ幼生飼育



▲ナマコの幼生

今後の課題

ました。これらの種苗は早ければ3年後から漁獲可能な大きさまで成長するといわれ、放流後の成長過程などを継続的に調査して事業の効果を明らかにする必要があります。

しかし、1ミリより小さい稚ナマコの試験放流を続けるためには、静穏域の確保や追跡調査手法の確立・資金の確保など、未解決の課題も多く残されており、試験研究機関と一緒に一つずつ課題を解決していかなくてはなりません。

このように、非常に厳しい日本海漁業の現状を打開するための各種試験調査事業が積丹町でも展開され、成果が期待されはじめています。今後も漁業の難しい特性を克服しながら、こうした漁業者自らの「つくり育てる漁業」の取り組みを継続して行い、町の基幹産業の漁業をより安定させ、生産性の高い産業へと発展させるためにも、漁業者、漁協、町が力を合わせて長く取り組むことが大切です。